【9】コーサンビーにおける釈尊の事績の年代推定

［0］以上コーサンビーと関係する人物を中心に、コーサンビーと仏教に係わる事項を広く原始仏教聖典とその注釈書文献から調査し、若干の考察を加えてきた。しなしながらそれらは、当該の事項に関する範囲内のことであって、広く他の事項と関連させてのものではなかったし、一応の結論を出したものの、最終的な結論を先送りした項目も多かった。そこで一応の資料調査を終えたいま、改めてさまざまな問題を検討し、それが釈尊の生涯のどの時点に起こったもので、釈尊教団形成史とどのように関係しているかを考えてみたい。

［0-1］これまで調査してきたコーサンビーと仏教にかかわる人物は、まずゴーシタ園を建立して、これを仏教サンガに寄進したゴーシタ長者であり、コーサンビーの王室に係わる人物としては、ウデーナ王と３人の王妃、すなわち仏教の信仰に篤かったサーマーヴァティーと、それにヴァースラダッター、そして反仏教的な立場に立っていたマーガンディヤー、そして王室に仏教を持ち込むきっかけを作ったサーマーヴァティーの侍女のクッジュッタラーであり、それにウデーナ王の息子と考えられているボーディ王子である。またコーサンビーの仏教に深い係わりのある比丘は、ウデーナ王と師弟関係を結んだと考えられるピンドーラ・バーラドヴァージャと、飲酒戒の制定因縁となったサーガタ、コーサンビーを主な活動地として数多くの不行跡を行い、仏教教団としては重要な事件であったコーサンビーの破僧事件にも係わりがあったのではないかと考えられるチャンナである。また阿難がコーサンビーを訪れたのは釈尊の秘書室長的な役割を果たしていた者として当然のことであるが、しかしそれ以来コーサンビーの人々とは深い関係を持ち続けたものと考えられる。

［0-2］以下にはこれらの人物を中心に、さまざまな事柄を特にその年代に主な関心を持ちながら考察する。その具体的な問題点は、

（1）仏教はコーサンビーに最初にいつ、誰によってもたらされたか
（2）ウデーナ王はいつ、どのように仏教に帰信するようになったか
（3）サーガタの毒龍退治はいつのことであったか
（4）コーサンビーの破僧事件はいつのことであったか
（5）釈尊はコーサンビーに何度来られ、それはいついつのことであったか

であって、これらに関連してゴーシタ園の建設、ボーディ王子のコーカナダ宮殿の建設、ピンドーラの出家時期、阿難とチャンナの関係などを併せ考察することになる。

［1］まず、仏教はコーサンビーに最初にいつ、誰によってもたらされたか、という問題である。可能性としては釈尊ご自身によってか、ピンドーラ・バーラドヴァージャによってかということになろう。

［1-1］ウデーナ王ははじめは仏教に理解を持っていなかった。そのウデーナ王が仏教に帰信するようになったのは、王妃のサーマーヴァティーの感化によってか、あるいはピンドーラの教化によってかである。両方ともそれを伝えるのはＢ資料であり、一人の人物が２度コンヴァージョンすることはないとすれば、それが別々の時点であることはないであろうから、この２つは同じころであったと考えるのが合理的であろう。

しかしながら仏教はウデーナ王が帰信する以前にコーサンビーに伝わっていたことは、ゴー

シタ長者らコーサンビーの3長者の話や、クッジュッタラーとサーマーヴァティーの話によって明らかであり、それは釈尊自身によるものであった。コーサンビーの仏教にピンドーラが登場するのはウデーナ王との係わりのみであるから、このように考えるとコーサンビーへの仏教初伝は釈尊によってであったと考えてよいであろう。

［1-2］それではそれはいつのことであったのであろうか。B文献のいうところであるが、ゴーシタ長者らは舎衛城の給孤独長者の話を聞いて舎衛城に行って、仏教に帰依して釈尊をコーサンビーに招待したとされる。これは給孤独長者の祇園精舎寄進イメージを踏襲したものであって、これ自体は史実であったと信じる価値はないかも知れないが、しかし政治的・経済的な面からも、あるいは釈迦族との位置関係という点からも、仏教にとってはコーサンビーよりは舎衛城の方が優先的な地位を占めていたはずであって、釈尊以外の者によって仏教がもたらされたのならいざ知らず、釈尊自身がコーサンビーに仏教を伝えられたとするなら、それは舎衛城への仏教布教よりも後のことであったであろう。

したがって先にも書いたように、釈尊の舎衛城、言い換えれば祇園精舎での初めての雨安居が仏成道14年であるとすると、少なくともコーサンビーへの仏教布教はそれ以降ということになる。しかもそれは仏が現れたことを聞いたヒマラヤの苦行者たちが、コーサンビーでの雨安居を過ごした後のことであるとされるから、釈尊が祇園精舎で初めての雨安居を過ごされたその年ではないことは明らかである。しかも当時のような原始的な情報伝達の状況を考え、その時点では波斯匿王が必ずしも仏教を外護していなかったということを考えると、コーサラ国の仏教がそれほど速やかにコーサンビーに伝わるということもなかったであろう。したがって単なる推測にしか過ぎないが、釈尊がコーサンビーに仏教を伝えられたのは、早くとも仏成道16年以降のことであったであろう。

またB文献資料によれば、サーマーヴァティーの信仰を得た釈尊は、毎日の説法を阿難に任せたというし、A文献によるコーサンビーの仏教と阿難との因縁浅からぬものを勘案すると、おそらく釈尊がはじめてコーサンビーを訪問された時には、侍者としての阿難も同行したのであろう。そうとすれば、阿難は釈尊の入滅まで25年間、侍者をつとめたというのであるから、釈尊成道の20年に侍者になったことになり、この訪問はこれ以降でなければならない。したがってもしそうだとすると、釈尊の最初のコーサンビー訪問は成道20年以降ということになる。

それではそれは少なくとも何年以前であったのであろうか。これは先にも書いたように、ボーディ王子が子供ができるかどうかを気にする年齢が20歳であると仮定すると、釈尊入滅よりも20年前でなければならないということになる。しかも釈尊は、ボーディ王子がコーカナダ宮殿を建設した年にバッガ国を訪問し、おそらくコーサンビーをも訪問しておられるわけであって、前述したようにそれは80歳になられた入滅の年ではありえず、おそらくその前の79歳の時でもないはずであるから、それを78歳とすると、58歳以前ということになる。釈尊の年齢は入胎した時を誕生日とする満年齢で数えられるから(1)、満58歳を迎えられたのは成道23年のアーサールハ月の満月の日、すなわち古代の中国暦でいえば4月16日ということになり、これは雨安居に入る時であるから、活動されたのは雨安居を出てからということになれば、それは成道24年以前ということになる。

すなわち釈尊によって初めてコーサンビーに仏教が伝えられたのは、仏成道20年以降、

仏成道24年以前の5年間のなかのいずれかの年ということになる。『中阿含』033の「侍者経」によれば、阿難が侍者に任命されたのは王舎城のことであって、その同じ年にコーサンビーに来られるようなことはないと仮定すれば成道21年以降、24年以前、すなわち釈尊の55歳以降、58歳以前ということになる。一応ここでは57歳、成道23年としておこう。ただしこれは現時点での目安であって、これから研究が進むにしたがって、変更がなされる可能性が十分にある数字である。

(1) 「モノグラフ」第1号に掲載した【論文3】「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」を参照されたい。

［2］それではウデーナ王はいつごろから仏教に帰信するようになったのであろうか。先にも書いたように、ウデーナ王は仏教の歴史にそれほど大きな足跡を残しているとは考えられず、したがってこれを考察することが仏教の歴史の一コマを明らかにするというものではない。しかしながら1国の専制君主が、仏教に理解があるかどうかは、その活動に大きな影響があったと思われるから、一応考察しておくことにしたい。

［2-1］B文献のいうところであるが、コーサンビーの王室関係者の中で最初に仏教信者になったのは王妃サーマーヴァティーの侍女であったクッジュッタラーである。彼女は釈尊の最初のコーサンビー訪問の時、3人の長者の交代での供養を譲ってもらったスマナという華鬘師が釈尊を招待したとき、偶然に釈尊の説法を聞いて仏教に帰依することになったとされる。そしてその日にサーマーヴァティーもクッジュッタラーから間接的に釈尊の説法を聞いてすぐさま仏教に帰依するようになり、それ以降壁に穴を開けて釈尊の姿を盗み見たというのであるから、明らかに釈尊の最初の訪問の時に帰依したことをイメージしているのである。しかしながらその時点ではウデーナ王は仏教に理解はなかった。

おそらくこのころのことであろう。これまたB文献のいうところであるが、まだ仏教に理解のなかったウデーナ王は自分の王園で休憩していたピンドーラにたまたま出会って、怒って赤蟻を振りまき、殺そうとしたとされる。ピンドーラは王園には舎衛城から神通力で通っていたというし、ピンドーラの出身地はおそらく王舎城近辺であったから、ピンドーラはコーサンビーに根拠をおいて活動していたわけではなかった。おそらく釈尊の最初の訪問に同行して、コーサンビーにやって来たのではなかろうか。これまた推測の域を出ないが、ピンドーラは舎利弗・目連の仲間であって、舎利弗・目連と一緒に釈尊の弟子になった。これは釈尊成道の10年目ないしは11年目のことである。そしてこの後釈尊は出家具足戒を受けた新参比丘は、少なくとも10年間は和尚と生活を共にしなければならないという規則を作られた。釈尊のこのコーサンビー訪問が成道23年であったとすると、すでにピンドーラは行動の自由を得ていたことになる。ただし善来具足戒を受けた者は「仏を上首とする比丘サンガ」の一員として釈尊と行動を共にするのが普通であったから、行動の自由を得た一人前の比丘となっていたとしても、釈尊とともにコーサンビーに来たとしても何の不思議もないわけである。

このようにウデーナ王がサーマーヴァティーの感化を受けはじめ、ピンドーラと初めて出合ったのは釈尊最初のコーサンビー訪問の時であったと考えられる。ただしこの時点では王はまだ仏教を信じるには至っていなかった。

［2-2］おそらくこの時に、王室の中で釈尊の教化を受けて仏教に帰信するようになったもう一人の人物がいた。それはボーディ王子の母親とされる、ウデーナ王のもう一人の王妃であったヴァースラダッターである。これはＡ文献の語るところであるが、この時彼女は懐妊していて、「生まれてくる子が男の子であろうと、女の子であろうと三宝に帰依します」と言ったという。ようするにボーディ王子は釈尊の最初のコーサンビー訪問の時にはまだ母親の胎内にいたのであるが、それから３、４年たって、王子が出胎して満１、２歳になったころに、今度はバッガ国を訪問された釈尊と、乳母の腰に抱かれて会うことになった。インドの婦人は現代でもこのように子どもを腰に抱くが、それはせいぜい５ヶ月から生まれて満２歳くらいまでの間であろう。この時王子は２回目の三宝帰依をしたとされる。最初の訪問の翌年とか、２年後とするのはあまりに詰まりすぎているから、これはその３年後ということにしておこう。釈尊の年齢に換算すると60歳、成道でいえば26年の時ということになる。

おそらくこの時にも釈尊は足を伸ばされてコーサンビーを訪れられたであろう。そしてこの時には仏教に帰依するようになっていたウデーナ王と会ったのではないであろうか。Ａ文献においてウデーナ王が釈尊と会ったという記述は、サーガタが毒龍を退治したとするエピソードの資料〈2〉のみであり、Ｂ文献によってもウデーナ王は釈尊との直接の繋がりは薄いように感じられるが、それは王の仏教帰信に釈尊が直接タッチされていなかったからであろう。

［3］次にサーガタの毒龍退治の年代を考えてみよう。これは釈尊がチェーティに来られたときのこととされているが、サーガタが毒龍退治をしたことを人々が称賛して、知らなままに酒をふるまわれ、酒に酔いつぶれたのはコーサンビーとされているから、この時にも釈尊はコーサンビーを訪れられていたということになる。

［3-1］【5】においてすでに考察したように、ここに登場するサーガタは阿難が秘書室長になる前の侍者ではなく、すでに神通力を得ているサーガタであるから、これは阿難が侍者になった以降のことであって、この時にはすでにコーサンビーに仏教が定着していたように描かれている。Ａ文献の一つには、この時たまたまコーサンビー王がチェーティに滞在していて、釈尊とコーサンビーにおいて会見したいと申し出たとしている。

そして彼が龍を退治したチェーティ国のバッダヴァティカー、あるいはバッガ国のスンスマーラギラは、位置関係からいえば舎衛城からコーサンビーへの道の途中にあって、釈尊のバッガ国訪問に言及されるのは、ボーディ王子がまだ幼児であって乳母の腰に抱かれていたときと、成人に達してコーカナダ宮殿を造ったときである。前者は釈尊の60歳くらいの時であり、後者は釈尊の最晩年である。

［3-2］なおこのとき『パーリ律』でいえば波逸提51条の飲酒戒が制定されたとされる。律の条文がどのように制定されていったかということは別に論じなければならないが、われわれは和尚と弟子の制が制定され、おそらくそれからまもなく白四羯磨受戒法が制定されたのであって、この時にサンガが成立したと考えてることは【論文16】に詳説したとおりである。そして白四羯磨受戒法が成立したということは、この時に受戒に関する資格や作法に関する規則、すなわち犍度の骨格となるものと、波羅提木叉の骨格となる基本的な生活規定も制定されたのでなければならないと考えている。それがどのようなものであったかはさら

に検討しなければならないが、４つの波羅夷罪と僧残罪の主立ったものは含まれていたであろう。これは釈尊成道 13 年のころのことである。

そして今の飲酒戒であるが、これはこの原初的な律蔵の規定には含まれていなかったかも知れないが、しかし過ちやすい条項であるから、それほど遅くもなかったであろう。このように考えると、これは先の２度のバッガ国訪問のうちの最初、すなわち釈尊の 60 歳くらいの時のことであったのではないかと思われる。

［4］次にコーサンビーの破僧事件がいつ起こったかということを検討する。先にこれは比丘尼サンガが成立した釈尊 63 歳の年から、提婆達多の破僧が行われた 72 歳までの 10 年間のいずれかの年としておいた。

［4-1］そしてそれ以降の検討において、この破僧事件にはチャンナが係わっていたのではないかということと、そうとするならばチャンナは釈尊が入滅される時点で心を痛められていた癌のような存在であったということから、最晩年に近いのではないかと推測しておいた。このような推測が正しいとするなら、これは 63 歳から 72 歳までの 10 年間の後半部分であったとすることができるかも知れない。このころは釈尊の最初のコーサンビー訪問から 10 年余を経過しているから、コーサンビーのサンガに紛争が起きるほどに、そしてコーサンビーの在家仏教信者たちは紛争する比丘たちに布施することをやめてサンガにプレッシャーをかけられるほどに、成熟していたということがいえるであろう。

［4-2］さらに提婆達多の破僧は釈尊がコーサンビーから王舎城に移られたときとするものもあるから、その前年であったということになるかも知れない。ただしコーサンビーの破僧資料は、釈尊はこのあとコーサンビーからバーラカローナカーラガーマへ行かれ、そこに住むバグに会われて、さらにパーチーナヴァンサダーヤ（Pācīnavaṃsadāya）に向かわれ、そこに住むアヌルッダ・ナンディヤ・キンビラに説法されて、そこから舎衛城に向かわれ、後を追いかけたコーサンビーの比丘たちは舎衛城で和解したとするから、提婆達多の破僧の前にコーサンビーにおられたとするのは、提婆達多の破僧よりもコーサンビーの破僧の方が早かったということを象徴的に示したものに過ぎないであろう。

このように考えると、コーサンビーの破僧は提婆達多の破僧の前年でもなかったように感じられる。まったくの推測であるが、現時点ではコーサンビーの破僧は提婆達多の破僧よりも２年ほど早い釈尊の 70 歳くらいのことと考えておく。

［4-3］このコーサンビーの破僧を教団史的に考えると、釈尊成道から 35 年くらいが経過して、「釈尊のサンガ」の中にも既成化が起きつつあったということができるかも知れない。宗教教団の既成化は、溌剌たる活動力が鈍って、細かく定められた規則にのっとって運営しさえすればよいという形式化と言い換えてもよいであろう。コーサンビーの破僧はＡ文献には記録が残らないほどの、ごく些細な規定の解釈から起こったものとされ、Ｂ文献では持律者と経師との対立であったとされている。まさしくこれは既成化の兆しであったわけである。そしてこの２年くらい後にそれが提婆達多の反逆という形で爆発したのである。

［5］ところでこのコーサンビーの破僧事件の年と、ボーディ王子のコーカナダ宮殿の建設の年とは同じであったのであろうか。先に推測しておいたように、コーカナダ宮殿の建設

はボーディ王子が満20歳ころになったころのことであって、成道40年から43年のころということになる。これは釈尊の75歳から78歳のころのこととなり、上記の3度のコーサンビー訪問の時期とは重ならない。もっともこれはバッガ国の訪問であり、このときにコーサンビーも訪問されたかどうかということは分からないが、ごく近い位置関係からコーサンビーをも訪問されたとするなら、これは第4回目のコーサンビー訪問となり、釈尊75歳から78歳のころのことであったということになる。一応ここでは目安として77歳のころということにしておく。

［6］以上のように、釈尊のコーサンビーにおける事績は、

（1）ゴーシタら3人の長者がゴーシタ園などの精舎を作って雨安居の招待をし、王妃サーマーヴァティーらが帰信した、最初の訪問が釈尊57歳のころ、

（2）ボーディ王子が乳母の腰に抱かれて会い、サーガタが龍を退治した第2回目の訪問は60歳のころ、

（3）コーサンビーのサンガが分裂した第3回目の訪問は70歳のころ、

（4）コーカナダ宮殿が建設されたときが77歳のころ、

ということになる。

もちろんこれらの年代は、すべてが現時点での推定であって、何年から何年という巾のあるものでは議論がしにくいので、無理をして特定化したものである。したがってけっして確定したものではなく、今後さらに他の事項に関する研究が進めば調整しなければならないという、暫定的な目安である。

［7］もちろん以上の4回のコーサンビー訪問のほかにも、釈尊のコーサンビー訪問があったかも知れない。

しかしながら、王舎城と舎衛城を結ぶ通常の遊行路からは若干外れていたかも知れないことは前述した通りであり、だからこそコーサンビーに来られたときには、チェーティにも、バッガにも寄られたであろうと想像するのである。

しかも釈尊の遊行はゆったりとしたものであって、【論文16】で詳説したように、1日の行程は1由旬が平均であったとされる。せいぜい10キロ程度である。また釈尊の遊行に費やされる期間はせいぜい4ヶ月間で、1回の遊行の最長は2ヶ月程度のものであった。そしてこの1日平均10キロで60日間の遊行では、ヴェーサーリー経由で585キロ、ベナレス経由で649キロの王舎城と舎衛城の間は往復できない。

このように考えると、釈尊が日常的にコーサンビーを通過されるということはなく、したがって釈尊のコーサンビー訪問は上記の4度であったとしても間違いはないものと考えられる。